

## 宗学と仏教学

—宗学とは何か?—

田中悠文

はじめに

宗内において、「宗学とは何か」と問うたならば、おそらくは、「真言宗学」、あるいは「真言教学」のことであるという答えが返ってくるであろう。ところが、肝心の「真言宗学（あるいは真言教学）」が一体的には如何なるものを指しているのかと云うことになれば、ことは必ずしも明瞭であるとは思われない。仏教学の一研究分野である密教学と伝統的な真言宗学の相違など、殊更、不明確ではないだろうか？

そこで本稿では、智山伝法院の担う役務の一つである「宗学」の充実に資するための一環として、件の「真言宗学」とは一体如何なるものを指し、その具体的な内容がどの様なものであり、また如何なる人物がどういった目的意識のもとにそれに取り組むのかを考察してみたい。その結果、「宗学」と「仏教学」相互間の問題意識の相違が明らかになるものと考ええる。

《本稿の構成》

- 一、宗学とは何か？—一般社会の認識—
- 二、宗学とは何か？—宗内学匠の認識—
- 三、宗学の内容とその従事者
- 四、宗学と仏教学

一、宗学とは何か？—一般社会の認識—

ここでは、まず最初に、一般社会において、「宗学」、ひいては「真言宗学」という言葉が、どの様に認識されているのかを考察する。以下、①〜④の七例をあげて、その理解内容と問題点を確認していく。

①『広辞苑』の説

最も一般的な国語辞典の一つである『広辞苑』（新村 出編、株式会社岩波書店刊）によると、

「しゅうがく【宗学】各宗門の教義に関する学問。」を意味するとされる。これだけでは、どのような人物が、何を目的にして、如何なる方法の学問を行うかが明確ではない。

②『日本語大辞典』の説

そこで、今度は日本語に関する専門辞典である『日本語大辞典』（梅棹忠夫・金田一春彦他監修、一九八九年、株式会社講談社刊）を見てみると、

「しゅうがく【宗学】《仏教語》各宗派で正統とされる教義に関する学問。」であると記される。「正統とされる教義」という断わりが付されている以外は、『広辞苑』と大同小異の認識である。

① 『仏教語大辞典』の説

前掲の二者の内容では、未だに不明瞭な点が残されているので、今度は多種ある仏教辞典の中から、『仏教語大辞典縮冊版』（中村 元著、一九九六年、東京書籍株式会社刊）を用いて、当該項目を見てみた所

「宗学」しゅうがく自己の属する宗派の教義の学問。」とある。

内容に、「自己の属する」と云う言葉があるので、宗内の人物（僧俗までは不明）が、「宗派の教義の学問」を行うという意味に受け取ることが出来る。

② 『仏教学辞典』の説

今度は、仏教々理の説明に重点がおかれていることに定評のある、『仏教学辞典』（多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉編、一九五五年、株式会社法蔵館刊）によって、もう少し詳しく、「宗学」の意味を確認しておきたい。

「しゅう 宗 尊んで主とせられるもの。

● 経論等の中で、その教説の中の樞要となるもの、中心要素となる教義をいう。宗要、宗旨ともいう。（中略）

● 尊ぶ教義を同じくする一団を宗といい、一宗団の中で更に分かれている場合に派という。宗団を他と区別するために宗門、宗派ともいい、その一派で説く教義の主旨を宗旨という。（中略）

また、その宗派の説く教義を宗義または宗乘、宗義の学を宗学（後略）と云う。

右の内容を要約してみたい。まず、「宗」とは「宗要」や「宗旨」とも称ばれるが、その意味は中心となる「教説」や「教義」のことである。ここから派生して、同じ「教義」を尊ぶ一団のことを「宗」という。そして、

特定の宗派が説く「教義」を、「宗義」、もしくは「宗乘」とよぶ。この「教義」＝「宗義」＝「宗乘」の学のこと  
 とが「宗学」であると定義されている。

以上、①～③によれば、一般に理解されている「宗学」の意味は、「特定宗派の教義の学（あるいは学問）」ということになる。しかし、分りきったことであるという前提のためか、④の『仏教語大辞典』以外は、「宗学」に従事する人物については言及していない。誰が従事するかは、きわめて重要な問題であるので、この点については、別に考察の対象としたい（三、宗学の内容とその従事者、参照）。

以下、宗内の学匠以外の歴史学（日本史）、民俗学、仏教学の学者による「宗学（真言宗学）」についての認識をうかがってみた。

④ 景山春樹氏の認識（日本史）

景山氏著『比叡山と高野山』（教育社歴史新書〈日本史〉29、一九八〇年、株式会社教育社刊）の「2 高野山寺—学侶と行人と聖方—学侶・行人」には、

「高野の一山大衆はこれを古く一〇世紀頃がくりよがたから学侶方ぎようじんがたと行人方ぎんがたの二つに區別している。学侶はその字義のとおり事相と教相の教学の研究と法儀の伝統維持などを専らとするもので（～後略～）」（同書、二二三頁）とある。

同氏は、本書を編まれるに際し、元高野山座主の堀田真快大僧正著『高野山金剛峰寺』（一九七二年、学生社刊）などを参照されている。同書は、高野山の伝統行事や仕来り、慣習、また様々な伝承などについて詳細である。景山氏の説は、こういった書物などを参考にされていることから、十分な説得力をもっている。

さて、その説を要約すると、十世紀頃の高野山の僧侶は、学侶と行人の二方に大別される。その内、学侶は真

言宗の教学の研究、及び伝統的法会儀式の伝承維持に従事していた。学侶の研究対象である真言宗の教学は、事相と教相の両者をその内容とすることが分る。

ここに来て、一般の学者の中にも、真言宗学（真言宗の教学）の内容が事相と教相の両方であり、この研究に従事するのは学侶であるという認識が有ることが分った。

⑤五来 重氏の認識（民俗学）

五来氏著「空海の真言密教と行的世界」（一九八四年、『空海の足跡』所収、角川書店刊）の「歴史的な空海と信仰的大師」には、「（～前略～）それは主として真言宗教団内部の祖師の教理教学研究で、空海の著述をとおして、空海の確立した真言密教の体系的構造をあきらかにすることであった。それは教相と事相の両面にわたるもので、教相は思想信仰であり、事相は実践であるとされてきた。そして教相と事相は車の両輪のごとしといわれる。思想信仰は実践によって現実化され、実践は思想信仰で意味づけられるとする。しかし事相は修法や祈祷の作法と印相、真言を内容とすにすぎないから、修法、祈祷の効験を發揮するために、行為の驗力ケリスミを蓄積する実践、すなわち「行」とは別物であった。空海はこの真言密教を成立させる教相と事相の基礎構造に、行的世界が必要であることを知っていたので、その行的実践の場を山や海の大自然にもとめたものとして私は思う。（～後略～）」（二〇〇六年、『KAWADE道の手帖 空海 世界的思想としての密教』再録、河出書房新社刊）と述べる。

五来氏によれば、真言宗教団内部の祖師の教理教学研究の対象が事相・教相の両面にわたるもので、その目的は大師の著作を通して、大師が確立した真言密教の体系的構造を明らかにすることであったとされる。前の景山氏同様、五来氏にあっても、真言宗の教理教学研究（真言宗学）の対象が事相・教相の両者であり、研究に従事

するのは真言宗教団内部の者であったと認識されていたことが分る。

①平川 彰氏の認識（仏教学）

平川氏編著『仏教研究入門』（一九八四年、大蔵出版株式会社刊）の「総論―仏教研究の手引―仏教研究の二つの方法」には、

「仏教の研究といっても、いろいろな方法がある。それは、仏教を知ろうとする人の目的が多様であり、その目的に応じて研究方法も多岐に分かれるからである。しかし仏教の研究を大きく分ければ、仏教全体の研究と、宗派仏教の研究との二つに分けることができる。前者はいわゆる「仏教学」であり、後者は「宗学」である。しかし仏教学といえども、宗学と同じ対象を研究するのであるが、そこには研究態度や研究方法の違いがある。（～後略～）」（同書、七頁）と云う。

ここで参照した書物が、専門に「仏教研究」を志す人のための手引き書であるからか、平川氏はのっけから、仏教研究の二つの方法（仏教全体を研究対象とする「仏教学」と特定宗派を研究対象とする「宗学」の内、特定宗派を研究対象とするのが「宗学」であると断定する。たしかに、ここまで見てきた①～③の四例は、「宗学」とは「特定宗派の教義の研究」であるという見解を示すので、その意味であるとも理解出来る。しかし何を目的とするのか、そして一体誰がそれに取り組むのかは問題とされていない。しかるに④、⑤の景山・五来両氏の場合、真言宗の場合の宗学の範囲は、単に教義分野の教相には限定されず、実践部門の事相をもその内容として居り、しかもその従事者は真言宗内部の僧侶であることを指摘している点、前者とその見解を異にしている。実は、この問題はきわめて重大な意味をもっている。つまり、平川氏の言及される「仏教学」と「宗学」の定義の通りであれば、単に仏教学や史学・文学・美術史などの研究者が、その研究対象を日本仏教の特定宗派に据えた

ならば、それも「宗学」であるということになる。その場合、研究対象によって「仏教学」や「宗学」と称されることになるものと思われるが、果して、そうであろうか？

◎まとめ

以上、一般社会において、「宗学」という言葉が、一体、どの様に受け取られているのか、いくつかの例証をあげて考察してきた。

結果、景山<sup>⑧</sup>氏・五来<sup>⑨</sup>氏を除き、一様に、「宗学」とは、特定宗派の教義、あるいは「宗派仏教」の全てを学問研究の対象とするものであるという認識をもっていたことが確認できた。景山・五来両氏も、「宗学（教学）」の特性として、研究的姿勢を指摘している点は他の例と共通している。しかし決定的な相違点がある。それは宗内の人間が、大師の確立した真言密教の教理を体系的に解明するため、事教二相を対象として、その研究に従事するという点である。

次節では、真言宗内の学匠が、「宗学」についてのどの様な認識をもっていたかを検討してみたい。

二、宗学とは何か？—宗内学匠の認識—

ここでは、前節で確認した、「宗学」についての一般社会における二通りの認識をもとに、今度は真言宗内の学匠の見解を検討してみたい。

⑧梅尾<sup>\*</sup>祥雲師の認識

梅尾師が、南山（高野山）教相の二大学匠とされた、宥快・長覚両大徳の第五百回忌追薦にあたって著された

「宥快、長覚両師の学脈」(一九一五年、『密宗学報紀念号』第二五号所収、真言宗京都大学而真会刊)によれば、「(～前略～)思うに宗祖御入定後、其の直弟たる実恵、真然の二大徳により東寺に伝法会、高野山に修学練行会が設けられ、此所に初めて我が宗学が生れたとは言え、平安朝の末季に至るまでは事相修法の隆盛に推されて、学究的な宗学は格別の発展を見るに至らなかつたと言つてよい。(～後略～)」と云われる。端的に云えば、梅尾師は、「宗学」とは学究(学問研究)的な営み(いとな)のことであると認識されていたことが推察される。

梅尾師は、また『秘密仏教史』(一九三三年、高野山大学出版部刊 一九八二年、密教文化研究所再刊)の「第三 日本の密教―一七 教学の発展―」において、「真言密教の教学が已に大師によりて大成せられて居つたとは云え、それはたゞ大綱たるに止まり、それを如何に消化し、如何に敷衍し、如何に適用すべきかと言う方面の研究たる宗学、若くは教学の興ることが必要なのである。而も大師已後、少くとも二百七十余年間のこの教学なるものの発展を見るに至らなかつた。是れこの時代の密教徒がひたすら現世利益を翹望する時代の風潮に迎合して、加持祈祷にのみ熱中したるが故である。(～中略～)然るに源信の浄土思想等に刺戟され、密教自家の立場を内省するの止むなきに至り、その結果、造蓮、信証、実範等の教義研究者も出で、延いては覺鑊上人の伝法会再興となり、こゝに初めて真言宗に於ける教学研究の機運を醸成するに至つたのである。(～後略～)」(同書、一九八二年再刊本、二八八頁、一行～二八九頁、一行)とも云われる。

これによれば、真言密教の教学は大師によつてその大綱が作られたが、その大師の教学を如何に消化し、如何に敷衍し、如何に適用するべきかを研究することが、待望される宗学、あるいは教学であるということにならう。さらに、『日本密教学道史』(一九四二年、高野山大学出版部刊)の「第三 中世学道史(上)―一八 京洛の談

論学道—」には、

〔～前略～〕かくこの学院に於ては、慧学と行学とを双修せしむることを特質としてゐるので、<sup>\*\*\*</sup>法皇はその『御遺告』に於て、「行と学とは必ず双ぶべし。若し一道を經歷せんとするも更らにこれを聴許すべからず。智愚勝劣ありと雖も、必ずこれを相励ますべし。行学兼備せざるは吾が本志にあらざるが故なり」といい、また「近世の学者、六識純淨ならずして、濫りに論教の旨を執し、<sup>しつ</sup>学解を貫んで<sup>たつと</sup>事行を賤しむ。また無智の行人は三学に研精を忘れて、纔かに修軌をのみ勤む。すなわち戲弄の如し。」とも誠しめられている。〔～中略～〕

これを要するに、京洛に於ける講論談義の学道は、皇室の庇護によりて各山に勃興したのであるけれども、御室一山や醍醐一山は何といつても事相行学の精査が中心であり、東寺一山が慧学教相の旗幟を鮮明ならしめたのに対し、嵯峨の教王常住院では、行学と慧学、すなわち事教二相の双修を目的とした所に各々その特色があるといつてよいのである。〔同書、一六四頁、一行く同、十四行〕と、後宇多法皇による嵯峨大覚寺における教王常住院の教育体制に関する事跡を例として、事相—行学と教相—慧学の双修による真言宗学の体解のあり方を紹介される。

ちなみに、『仏教学辞典』（多屋、横超、舟橋他、法蔵館）によつて、行学・慧学に関する記事を探つてみたところ、「ぎがく 義学」の項目に、

「理論的な学問。解学ともいう。〔中略〕教理、理論に関する学問をいう。行証を主とする行学に対し、ただ智解を増すに止まるものを指す。」とあり、さらに「げぎょう 解行」の項目には、

「智解と修行をいう。見聞学習によつて教理を智解することと、その教理を実践躬行すること。仏道の真

理を了解する智解と観心修行とは相因り相資あひよけておこるものであるから、これを解行相応・解行具足・開解立行ともいい、解行が鳥の両翼、車の両輪に譬えられるのはどちらも欠くことのできないものであることを意味する。解も行もともに学道の法であるから、解学、行学ということがある。」と云う。

「慧学」に類する語句として、「義学」や「解学」がある。これは教理理論に関する学問である。その方法と目標は、見聞学習という手続きによって教理を智解することである。一方、「行学」とは、仏道の真理を明した教理を見聞学習することで了解し、その教理を実践修行することである。ここで問題とされる「学」と、「仏教学」に附される「学」の位相の違いが、おぼろ気ながらも見えてきたように思われる。

梅尾師の取り上げられた、後宇多院の教王常住院における行慧双修とは、宗学を修学する上で、きわめてバランスのとれたあり方であると思われる。

\*梅尾うめのお祥雲しょううん。一八八一〜一九五三年。香川県出身。一九〇六年、真言宗京都高等学校卒（真言宗京都大学・京都専門学校の前身）。一九一三年、真言宗連合京都大学教授。一九二一年、高野山金剛峰寺より、サンスクリット語、チベット語、密教聖典、秘密仏教研究のため三ヶ年、ヨーロッパ留学に派遣される。一九二四年、帰国、高野山大学教授。一九四五年、高野山大学長就任。はじめ京都において、真言宗の伝統宗学の碩学である長谷宝秀師等の学匠に就いて事教二相、宗余乗を修学した。後に伝統宗学の基礎の上に近代仏教学の研究方法を採用し、独自の研究成果を上げた。近代密教学の父。

\* \* \* 教王常住院。後宇多天皇が嵯峨大覚寺に創建。学頭（左右各一名）、学生三十名。学科は金、胎、声明の三業に各初中後の三ヶ年制。

\* \* \* 後宇多天皇。法諱、金剛性。一二六七〜一三二四年。龟山天皇の第二皇子。道宝、勝信、禪助、叡尊、憲淳に真言密教の小野、広沢、醍醐の各流派を相承した。後宇多上皇御製の『御遺告』一卷は国宝。内容は大覚寺相伝の法流の紹隆を企図した書である。全二十五条。

### ⑤ 高神たか覚昇師の見解

智山勸学院・同専門学校・大正大学教授を歴任した智山の学匠、高神師の「弘法大師の仏身観」（一九三四年、密教研究特輯号『弘法大師研究』所収、高野山大学密教研究会刊）の「七」には、

「（前略）私おもうに元來大師の教学たる密教学を事教二相の立場より吟味するとき、二つの旗印によつて表現しうるのである。即ち教相的にいへば即事而真、事相的にいへば即身成仏である。換言せば即身成仏の哲学的表現は即事而真であり、即事而真の宗教的表現は即身成仏であつて、両者は二にして一である。而かも哲学は花であり宗教は果実である以上、即事而真は即身成仏の理論的根柢でしかない。この意味に於て結局真言密教唯一のスローガンは即身成仏にあるといつてよいわけである。（中略）かるが故に真言学徒として大師への報恩の道は、単に真言学への解の人になるのではない。それは実に真言学を行ずる人になることである。法身説法を、即事而真を、即身成仏を、如実知自心を語る人となるのではなくして、それを歩む人になることである。所詮宗教の生命は語るより歩むところにある。語りつ、歩み、歩みつ、語る、そこに真言行人の使命があるのではないか。（後略）。」（同書、一一九頁、十五行～一二二頁、二行）と云う。

高神師は、大師の教学である密教学（ここで使用される「密教学」と云う語句は真言学・真言密教と同じ意味で用いられて居り、現代、仏教学の一分野としてある密教学とは異なる）の唯一のスローガンが「即身成仏」であり、それは事相的（宗教的）表現であり、その教相的（哲学的）表現である「即事而真」は、あくまで「即身成仏」の理論的根柢でしかない。真言学徒は、真言学を学解する立場に止まらず、それを行ずる人になるべきことを語られる。要するに、密教学Ⅱ真言学Ⅱ宗学を学するというこの意味は、一般的な学問とは異なり、単に理論的な学問研究によつて学的成果を出すことを目指すのではなく、あくまで真言宗の僧のあるべき生き方を規

定する営みを云うものと考えられる。

① 高井隆秀師の見解

高井能化は、近代智山の学匠である高井觀海能化の御子息で、智山専門学校で高井・高神・那須・若木・渡辺の諸師について真言宗乘・余乗を学ばれ、種智院大学において、小田慈舟・大山公淳両師等の学匠に宗学を学ばれ、また永らく種智院大学や智山専修学院で本宗子弟の教育につとめられた。御専門は正に「宗学」であった。ここでは、筆者が学生時分に能化の大学における『密教学概論』の板書を筆記したノートによって、「宗学」についての御説を確認しておきたい。筆記録の「真言密教の經典論書 一、真言密教の研究手法」には、「(一)前略(一)以上、一八八部四五八巻が真言宗所学の経律論となつているのであるが、これを一々研究することは容易ではない。また研究の順序として、直ちにこの経論を紐解いてみても真言密教の教義信条を心得ることが出来ない。真言密教の法門は深秘であつて、その師伝・口決によらなければその真意趣を解することはとうてい出来ないのである。(一)中略(一)」として、真言密教は「師伝・口決」、つまり師について宗学を体系的に学ばれた方から、直接、教示を受けなければ、その本来の意義は領解出来ないとされる。

更に、「(一)中略(一)これを直ちに紐解いてみても真言密教の全体を知ることとは出来ない。真言密教では、まず順序として真言阿闍梨から真言密教の教えについての概論をおそわり、次いで弘法大師の御選述を紐解き、すくなくとも許可灌頂を受けて、事教二相にわたり、伝授、講伝を受法し、更に経軌の研究に入るのを順序とする。

古来、真言宗学の範圍を大体「二十五巻書(章)」と定められている。「二十五巻書」は十巻章、大日経疏前五巻、釈論十巻とであるが、この二十五巻書を研究するなれば、まず真言密教の大体はわかることになつ

ているのである。(～後略～)と云われる。これによれば、真言密教を学ぶには、まず阿闍梨について概論を教わり、次に大師の選述を学び、少くとも許可灌頂を受け、事教二相の伝授、講伝を受法しその上で経軌を研究するという順序によること分る。また古来の説として、真言宗学の範囲を二十五卷書(疏五卷、釈十卷、及び十卷章)とされ、それらを研究することで、真言密教の大体が理解されると云われる。

\*高神覚昇。一八九四～一九四八年。愛知県生れ。一九一六年、私立大学智山勸学院卒。大谷大学、東大寺勸学院に留学。華嚴学、西田哲学などを学ぶ。一九二〇年、智山勸学院助教。一九二三年、同大学教授。智山専門学校教授を経、大正大学教授を歴任。一九三四年、ラジオ仏教講座・般若心経を放送。友松円諦と真理運動を行う。

\*高井隆秀。一九一六～一九九九年。滋賀県出身。智山専門学校卒業。真言宗委託研究生・智山教学財団研究生を経、種智院大  
学教授・智山専修学院講師等を歴任。真言宗智山派管長・総本山智積院第六十六世化主。

\*高井観海。一八八五～一九五三年。和歌山県根来村出身。一九〇六年、東洋大学卒業。一九〇七年、智山勸学院卒業。国内留  
学生となり性相学を学ぶ。瑜伽教如大僧正にしたがい宗乗の事教二相を修学。一九一四年、智山大学教授。一九三一年、智山専門学校  
長。同一九四四年、退任。一九四六年、真言宗智山派管長・総本山智積院第五十五世化主。

◎まとめ

以上、ここでは真言宗内の学匠による「宗学」についての認識を確認するために、近現代密教学・真言学を代表する梶尾師、智山の高神、高井両師の説を取り上げた。

結果、梶尾師の意図する「宗学」(教学)とは、いわゆる伝統的、訓詁学的なあり方だけではなく、むしろ大師が大綱を定めた真言密教を、(現代に生きる私たち真言宗僧侶が)如何に消化し、敷衍し、(時代に?)適用する  
かであった。一方、高神師の場合、私たちが如何に「宗学」に取り組みかという具体的立場を取り上げ、大師

の真言密教の唯一の目標こそ「即身成仏」であるから、真言宗学徒は、「即身成仏」の理論的根拠を明らかにする「教相」の学解に止まらず、それをふまえて「即身成仏」を実践（事相）するべきであるとする。高井師は、真言密教は師に従って学ぶべきものとされ、具体的な手続きとして概論、大師選述の研究、灌頂・事教二相の受法、経軌の研究の順序をあげ、加えて真言宗学の範囲として、いわゆる「疏釈二十五卷書」を示される。

三師の言及には、いずれも「宗学」には学問研究という傾向が強いことがうかがわれる。しかし、その前提として真言宗僧侶がそれに従事するのであり、また単に学解一辺倒ではなく、あくまで師にしたがって事教二相を双修するという立場がうかがえる。

### 三、宗学の内容とその従事者

前節までに、「宗学」という言葉が、一般社会でどの様に認識され、また宗内ではどの様に理解されていたか、いくつかの例を上げて考証してきた。結果、一般に理解されている「宗学」の意味は、景山・五来両氏を除けば、いずれも仏教学と同じく学問研究であり、その対象を日本の特定宗派の教義などに据えたものと考えられていたことが確認された。一方、宗内諸学匠の見解をまとめると、真言宗僧侶が師にしたがって事教二相を修得し、しかも学解にとどまらず実践するあり方が「宗学」であるということになる。

ここでは、「真言宗学」の内容、及び「宗学」に従事する人の問題について考えてみたい。

#### ①長谷宝秀師の場合

明治三十八年（一九〇五）、京都東寺の真言宗連合高等学校において、長谷宝秀師による『理趣経講伝』の内容を、梅尾祥雲師が筆録した『理趣経聞書』（二〇〇三年、『梅尾祥雲遺稿集』聞書編巻第一、高野山出版社刊）

の「大意 二別して当經の用心を示す 1 講伝の規則」によれば、

「(～前略～) およそ自宗には教相と事相と講伝との三種ありて、開演の法、同じからず。教相には顕密對弁と自宗不共との別あれども、ともに未灌頂の人にも許す。事相には野沢十二流・支派七十余流あれども、みな印明持作に亘りて秘密の深旨を示す故に、未灌頂の人には許さず。(～中略～)

次に講伝は、事相にあらず、教相にあらず、事・教の両際に亘りて秘密甚深の法を示す。印明持作に亘りて示すことはなけれども真言等を授くる故に、未灌頂の人には許さず。(～後略～)」(同書、五頁)と云う。長谷師によれば、真言宗には教相・事相・講伝の三分野があることが分る。

② 那須政隆師の場合

那須能化による「幸心方一流伝授」の講録の第一輯―「第一章 事相と教相」には、

「真言密教の教法は、教相と事相とに大別される。教相は真言宗の覺りを学問的に究明する部面であり、事相は真言宗の教理を事作法に移して実修する部面である。即ち一は理論であり、一は実践である。凡そ教法の目的は苦惱より解脱するにあるが、その目的を達成するためには、理論的に究明して覺の所在を明らかにし、その理論の所詮を事作法に移して行為しなくてはならぬ。故に、理論と実践、即ち教相と事相を鳥の双翼、車の両輪に喩え、両者を並行的に修学しなければ、完全な真言行者として真言道を歩み、即身成仏の大願を成就することが不可能であるとされている。(～後略～)」(同書、一頁)

那須能化は、真言密教の教法に事相と教相があり、真言宗の覺りを学問的、理論的に究明してその所在を明らかにする部面が教相で、その理論を実践に移す部面が事相であると云われる。そして事相と教相の両者を並行的に修学することによって、真言行者として「即身成仏」を成就できるとされる。

\*長谷宝秀はせほうしゅう 一八六九～一九四八年。香川県出身。土宜法龍師に師事。一八九八年、高野山大学林卒業。一九〇〇～一九四七年まで真言宗京都大学（京都専門学校）教授。

\*那須政隆なすまのりゅう 一八九四～一九八七年。愛知県出身。木村政覚師に師事。一九一七年、私立大学智山勸学院本科卒業。一九一九年から高野山・東寺に留学し森田龍徳師・長谷宝秀師に就いて宗乗事教二相を修学。一九二二年、智山勸学院助教。一九二七年、智山専門学校教授。以後、大正大学教授、予科長、真言学研究室主任、仏教学部長を歴任。一九五七年、大正大学々々長。真言宗智山派管長・総本山智積院第六十世化主。

### ◎まとめ

以上、長谷和上と那須能化の言及をうかがってみた。要するに真言宗の教法（宗学）としては事相と教相の二面があり、その教授内容による分類として教相・事相・講伝の三つがあつて、教相は未灌頂の者にも教授されるが、事相・講伝は已灌頂者にのみ伝授される分野である。つまり真言宗学の範囲としては事教二相の全てがそれであり、学すべき人はあくまで真言宗僧侶で、公開対象として已灌頂者には事教二相の全てが、未灌頂者には教相のみが教示されることが確認できたものと考ええる。「宗学」とは、あくまで真言宗僧侶のあるべき生き方の規範となるものであり、断じて「特定宗派の研究」の名称ではあり得ないのである。

### 四、おわりにかえて―宗学と仏教学―

よく「宗学」、「仏教学」と並び称されることを耳にする。しかし、果して両者は同一地平の上で論じることが出来得る関係にあるのだろうか？確かに両者ともに「学」という字が付くけれども、その意味内容は全く違うのではないだろうか？「仏教学」は、文献学主体の学術研究であると思われるが、一方の「宗学」は、「三学」や

律蔵における「学處」の様に知識偏重に堕さない実践的体系を指すものと考えられるからである。

結論から云えば、「宗学」とは、三密瑜伽を實踐する真言宗僧侶が、「即身成仏」の理論的根拠を確認するための教相を基本として、その体現のための事相の実修にいたる全ての営みを総称した言葉であると考えられる。誰が、どの様な目的をもつて、何を、どうするかといった点が「宗学」の場合は、はっきり規定されている。この点が「仏教学」という学術との目的意識の相違であろう。

ただ、しかし、実際に「宗学」に取り組む場合に於ても、中世、近代の学匠ならばいざ知らず、伝統宗学の専門教育のための機関やその機会をほぼ喪失しつつある現代の私たちの場合、伝統的宗門の教育によって宗学を体得された師にしたがって面受相承を受けることも、伝承者の相い継ぐ遷化をうけて、物理的にもそれほど容易なことではない。そのため、「宗学」に取り組もうとする場合でも目的意識を、真言宗という「即身成仏」という覚の定義・理論を確認するために据えて、例えば長谷・梅尾・高井・高神・那須諸先学の遺された成果を指南にして、今度は近現代仏教学の客観的かつ厳密な文献研究の手法を動員して、その問題を究明するという手続きに依って、伝統的在り方を、補完せざるを得ない状況になりつつある。故に、現代に生きる私たち智山派僧侶が、「宗学」という伝統的真言密教の教育体系を次世代に伝えるためには、まずもって智山専門学校本科修了の先学方が伝承された事教二相、宗、余乗にわたる大枠を継承することが必要であると考える。その大枠を継承した上で、今度は、現代という時代に適用した「宗学」教育の在り方を模索する取り組みが求められるのではないだろうか？

〈キーワード〉宗学と仏教学、伝統宗学、事教二相